

# 語学教育法開発における一探究

## — 中国語教室運営の試みを通して —

ト 雁<sup>1</sup>, 山口 若 菜<sup>1</sup>,  
裘 曉 蘭<sup>2</sup>

### ○ はじめに

大学における中国語履修者は、大きな流れとして、年々増加の傾向にあるが、履修者増に見合ったクラス編成が認められなく、体制的考慮が追いつかない中、教育の質的保証が課題になっている。

淑徳大学総合福祉学部の中国語初級授業は履修者人数が非常に多い。特に近年のゆとり教育制度下で中・高等教育を受けた学生たちは、多くが学習方法を得ておらず、また、コミュニケーション能力の低下や、学習意欲と持続力の低下などの問題を抱え、語学教育における困難は大きい。

以上のような問題を解決しつつ、限られた授業時間数で、如何に期待される教育効果を上げるかが、教育者の大きな課題である。

本研究は、筆者たちが教育現場実態に応じ、教室運営の工夫をすることを通して、教育効果の向上を目指した実践に関する記録と検討である。

### 第1章 中国語教室の現状と目標

上述した通り、本学部の中国語教育条件が限られた中、語学教育を通して、学生に対する理想的な教育効果を最大限に上げるため、先ず、現状及び現存問題点の把握と、実現可能な目標を明白にしなければならない。また、学習者の関心と学ぶ意欲の持続を促しつつ、効率よく学習を進め、かつ記憶を定着させ、コミュニケーション能力の伸長を目指すため、教員は教室運営に工夫を凝らすべきである。

---

<sup>1</sup>淑徳大学総合福祉学部, <sup>2</sup>千葉大学普遍教育

### 1-1. 中国語教室の問題点

特に本学部の中国語初級（新カリでは中国語基礎Ⅰ，新新カリでは中国語Ⅰ）クラスにおいて、教育効果実現に当たり、大きく4つの問題が存在する。

#### ① 基礎クラス履修者人数過多。

本学部の中国語初級クラスは、近年履修者が年々増え、今年度は1クラス80人を超えるような現象まで起きた。3年前から、履修人数が極端に多い場合の対応処置として、学期の途中であっても、急遽、クラスを二分し、2名の教員がそれぞれ同じ時間で別々に講義を担当する、という方法が取られてきた。しかし、後述するように、このような方法は同時限同名科目の授業に進度と内容のずれが生じ、学生の後期履修に不便をもたらす結果ともなるが、不利な条件での可能な限りの改善策が求められる。

#### ② 学生の外国語苦手意識。

本学部の学生の多くは、中学校及び高等学校で英語教育を受けているにもかかわらず、あまり外国語学習に慣れていない。外国語（英語）が嫌いだという学生も数多くいる。学生のこうした苦手意識の原因は、外国語学習は必要ないという判断に基づくというよりは、それまでの外国語学習の過程において、困難に直面するばかりで、楽しさを感じられなかったことにあると思われ、また、困難に逢うと容易に挫折し、そのまま再挑戦することなく対象への関心を失う傾向の人が増加したことも、外国語嫌いの増加や、継続的な外国語学習が努力を要するものとして敬遠されることの一因と考えられる。

また、中国語の発音や文法を新たに学習する際に、多くの日本人学習者は、英語学習で身につけた癖に影響されて戸惑いが多く、英語と中国語の切り替えがスムーズに行かない場合、中国語の学習をより困難だと感じるようである。

#### ③ 学生のコミュニケーション能力低下。

近年特に低学年の学生にコミュニケーション能力低下現象が起きていると巷で論じられる。ゆとり教育に目指された個人差を伸ばすという希望や目標が、むしろ若者の対人交流や交渉の能力低下、個人対個人、個人対集団の意思疎通の困難を招き、コミュニケーション能力云々より、他者と意思を疎通しようとする意思さえ持ちにくくなる結果になったと認識できよう。

語学教育現場では、学習者同士、教育者と学習者間が、お互いを身近な存在として感じられた場合こそ、学習効果の達成が図れるが、相手或いは他者に意思表示をすることさえも苦手とする学習者に対しては、教育者として克服すべき困難も大きい。

#### ④ 相互不干渉という日本文化特有の認識の影響。

文化論的指摘でしばしば言及されることであるが、日本には「察しと思い遣り」の文化（和辻哲郎『風土』1979）が存在する。江戸期に形成されたこの文化は、他者の生き方に干渉せず、その生き方を尊重する相互不干渉の美学として根付き、現在もなお生きている。

他者を尊重して干渉しないことは、日本人のコミュニティ生活において非常に賛美されることであるが、語学教育現場においてもこの傾向が表れ、マイナスの働きをして学習に支障を来していると考えられる。同じ教室にしながら、他の学習者の発音や学習態度について、他人のこととし、自発的に意見を発表することもなければ、知らない人とは会話練習もできないなど、語学教室にとって理想的でない環境要因を作りがちである。

以上のような問題を認識し、中国語授業の所期教育目標達成を目指すため、効率の良い教室運営を心掛けなければならない。

### 1-2. 中国語教育で目指すもの

中国語の発音は日本人学習者にとって習得が難しいとされる。しかし、その難しさを逆に教育方法でうまく運用することもできる。難しい発音を学習者全員で繰り返し練習することを通して、クラスの連帯感と一体感を育むことができよう。これは、中国語特有の教学法として、発音の習得という第一義よりも教育効果が大きいと考えられよう（塚本信也，日本中国語学会電子通讯第38号，2009）。従前の、読み書きを中心とした単調な外国語学習よりも実技に近いという感覚が、大学受験生として英文法と格闘した経験のある学習者には、新鮮に映ることが考えられる。

これを実現させるには、講義を履修した学生一人一人の状況を把握し、特に大学学習に慣れていない低学年学生に対し、導入教育を含めた細やかな気配りが大切である。

本学の学生で中国語を履修した者のうち、履修を決めた段階では、大半が中国語の習得は自らにとって必要だと考えていたようである（第4章を参照）。しかし、周知の如く選択科目は途中で放棄されやすい。中国語は、選択科目であるが故に、学習内容の習得或いは単位の取得が困難と学生が自ら判断すると、途中で学習を放棄しがちである。優秀な成績を収める積極的な学生の学習意欲を更に刺激するような高い水準の授業を行うことができれば理想的であるが、実際の教育現場はこのように整っているとは限らない。まずは脱落者が少なくなるように配慮し、どの学習者も自然と中国語学習から楽しみを見出すように導くことが肝要であり、これを可能にするのは工夫次第である。既に本キャンパスの授業は、勉強する喜びを理解する学生が輩出するという実績を積んでいる。

クラスを構成する受講者の所属や学習目的などは様々である。学年や学科を異にする学生

が、中国語の選択科目を通して偶々一堂に会して勉強しているという場合がほとんどであり、履修の理由もそれぞれ異なり、学力もまた差が大きい。週に一度しかない授業において、何に重点をおいて教室運営を図るべきかは常に教育者の悩むところであるが、バランスの取れた教育内容と方法こそ、効率の良い教室運営に繋がる。

ここでいうバランスの取れた教育とは、授業内容の充実・進度の調整・学生の興味を継続させる手段ばかりでなく、学生に対する語学以外の大学基礎教育も終始を貫く教育を指す。これらをバランス良く取り入れた教育ができれば、前節に挙げた①～④の問題を解決することも可能になる。

その基本は、筆者は、教育＝コミュニケーションと考える。

コミュニケーションができればこそ、教育者は学習者の注意力と関心を引き起こすことができ、学習者は教育者と率直な意見交換ができ、知識の吸収が促進される。最も重要なのは、教員が教育相手に、受け入れやすいようなアコモデーティブ (accommodative) なアプローチに努め、彼らとコミュニケーションができるような機能 (パイプ、チャンネル) を作り上げることからではないかと思われる。コミュニケーションが教育の基礎である。

相互に意思疎通ができ、コミュニケーションを基本にする教育は、第二言語の選択科目であっても、以下の達成目標を掲げることができる。

- a. 学生の学力向上, 学習意欲向上
- b. 語学資格や就職を目指すモチベーション向上
- c. 対人コミュニケーション能力向上
- d. 社会人としての素質養成

d. に関しては、教室における私語の制止や、学習態度の矯正、礼儀作法の指導を含み、学生の大学生生活の質的向上に繋がるものであり、語学力の習得と並んで筆者の特に重視するところである。

教育効果を望むなら、現存困難克服のための工夫が必要であり、教育現場参加者の文化 (他言語・民族の文化及び集団文化や個人所持の文化\*) 特質を認識した上で対応する教授法を検討し、実施する試みが必要である。

---

\*ト 雁 (1990) 「あいさつ行動様式に関する基礎的探求」『日本文化研究』(筑波大学大学院博士課程 日本文化研究学際カリキュラム紀要) 参照。

## 第2章 先行研究による研究

第1章に取り上げたように、我々は中国語の授業において、学習効果を上げる上で多くの課題を抱えており、教育現場の実態に応じた教室運営の工夫をする必要がある。本章では、現在ある種々の問題を解決し、対処するための実践的な教育を、先行研究を踏まえて模索する。

### 2-1. アコモデーション理論

会話の相手が話す内容を理解することができない時、その原因は多くの場合、双方が自己中心的にことばを選び、相手が何を理解し何を理解しないのかという点に対する配慮を欠いた話し方にある。更に、相手の話す内容が理解不能な場合、直ちに相手とその話の内容に対する興味を失い、そこでコミュニケーションを放棄する者もある。近年の日本では、他者及び自らの自由を尊重するために相互不干渉を保つという文化的特質に加え、他者に対して無関心であるという傾向が加わり、他者と円滑なコミュニケーションを取る方法が身に付かないという問題が起きている。正にこの問題が、語学授業の中にも存在し、それぞれの学習者は、教育者に促されなければ自発的に自らの意見を述べることは少なく、また、授業内容の理解に問題が生じた場合、直ちに対象への興味を喪失してしまいがちである。

学習者のコミュニケーション能力を伸長させるためには、教育者自らが円滑なコミュニケーションの取り方の例を示し、相手の興味を喚起する話し方の手本を実践的に示さねばならない。語学学習を困難にしている原因が、単に語学力の不足にあるのではなく、コミュニケーション能力の不足も関係するというを、またコミュニケーションは自ら行う意志があれば可能であるということ、学習者が理解できれば、その後の学習効果が大きいに期待できる。

一般には、異なる言語でコミュニケーションを取る話者同士が、互いに会話をうまく進めようとする場合、お互いが理解できることばを選んで話そうという意識が働き、結果として両者の言葉遣いが互いによく似てくるという指摘がある (Giles and Smith, 1979)。お互いの意思疎通がスムーズに行くように、会話中に相手に理解されそうにない表現を意識的に避けるのである。これはアコモデーション理論 (accommodation theory) と呼ばれる。言語的アコモデーション理論とは、コミュニケーション上、相手との関係をどう調節するかという問題に対する洞察を理論化したもので、言語社会心理学の見方から来たものである。その基本的な考え方は、次の表にまとめることができる。

表1 (言語的) アコモデーション理論

	心理的収束	心理的拡散
言語的収束	A	C
言語的拡散	B	D

(武橋, 1999による)

相手に好意や関心を抱いてアプローチする場合、心理的収束 (psychological convergence) が行われ、同じ言語 (相手に同調する言語) を使おうとする言語的収束 (linguistic convergence) が実現される。これは表のAに当たる。

相手と関わりたくない場合など、心理的拡散 (psychological divergence) が行われる場合には、言語的拡散 (linguistic divergence) が起きる。これはBの場合である。話し手が聞き手と理解し合いたいと思えば、両者の理解可能な言語を用いようとし、反対に、話し手が自分の使う言語を聞き手に近づけようとしなない場合には、理解し合いたくない或いは理解する必要がないと考えている場合もあるということである。すなわち、対話の相手と理解し合うためには、双方が歩み寄る態度が肝要である。

外国語の教育と学習の基本は、言語的収束である。我々が語学教育を実施する際、教室内の個人同士の関係が、心理的に収束 (A) であれば拡散 (C) であれば、少なくとも言語的収束を実現していることが必要である。外国語の教育と学習の要は、相手と理解し合おうという態度の養成と、その理解し合うための方法の習得である。

スピーチスタイルのアコモデーションは、相手との心理的な距離を縮める効果を持つ。則ち、「単に知的意味の伝達だけでなく、お互いの心情的絆を得るために本来は自分の使用語彙でないものを相手に合わせて使うということもある。何事においても共通の心情的基盤にこだわり、できる限り相手に合わせようとする傾向の日本人にとっては、スピーチスタイルのaccommodationはお互いの連帯意識を高め、会話をうまく進めるための重要なストラテジーになっている。」(陣内, 1988) という指摘の通り、自らが日常的には使用しない、他者の言語を敢えて習得しようとする姿勢が、相手との心情的な絆をもたらす結果としてコミュニケーションを円滑にする。つまり、語学学習を通じてスピーチスタイルのアコモデーションを学んだ学習者は、会話の相手との心理的な距離を縮める方法をも同時に獲得し、コミュニケーション能力が向上すると考えられる。

会話にどの言語変種を使用するかに関わらず、重要なことは、それぞれの場面において相応しい言葉遣いを瞬時に選び取る能力の養成である。例えば、子どもと大人が話をする場合には、語彙が豊富でことばを選ぶことのできる大人の方が、子どもの理解できることばを選んで話す。また、日本語を学びたての外国人と日本人が会話をする場合には、日本人の方が平易な言葉遣いであるよう心掛けて話すことで、会話をスムーズに進めることができる。反対に、学者同士や専門家同士、同業者間の会話などでは、共通理解のある術語で話し合った方が効率が良い。コミュニケーションにおいては共通の言語体系が必要であるため、まずは相手が理解できることばを使うことが重要であるが、更には相手を見て、自分がどのような話し方をすべきか、場面に応じた柔軟なアコモデーション (配慮) ができるようになることが、円滑なコミュニケーションの鍵である。



授業においては、教育者と学習者とが双方で歩み寄り、親しみやすい空間の中で積極的に授業を作ることが、学習者の理解と関心の持続、及び授業の効率的な進行に繋がる。そのため、教育者は学習者の理解の段階に合わせ、特に初学の段階では平易なことばを選んで説明に用いる必要がある。また、学習者同士が、習い覚えたばかりの外国語を用いて実際に会話を実践してみるといった、学習者の理解度を自然に確認できるような授業の工夫も効果的である。同じ授業空間を共有する学友と、外国語で理解し合うことに成功した時、学習者は達成感と共に、どの言語を使用する場合にも必要な、コミュニケーションの方法をも身に付けることができる。

### 2-2. エドガー・戴尔 (Edgar Dale) の「経験の円錐 (Cone of Experience)」

語学学習の場合、学習の成果とは、正確な発音の定着、語彙の増加、場面に応じて相応しいことばを対話の相手に対して発することができる、などが挙げられる。但し、週一回程度の第二外国語の授業に出席するだけでは、一般に語学力は進歩しにくく、授業内容もまた記憶に定着しにくい。受動的な学習では、学習の効果が得られにくいということである。この問題を解決するために、教育現場では、実践的方法が用いられてきた。すなわち、学習者にとって受動的になりがちな授業を、より印象に残り、能動的に参加できる内容に近づけるために、実物の映像や音声教材に取り入れ、また、個々の高度注意関心を喚起し、参加者の自身参加に訴えかける手法である。この理論的に強い影響を与えたのは、エドガー・戴尔 (Edgar Dale) である。戴尔は経験を重視する教育観を持ち、学習者に具体的な経験を

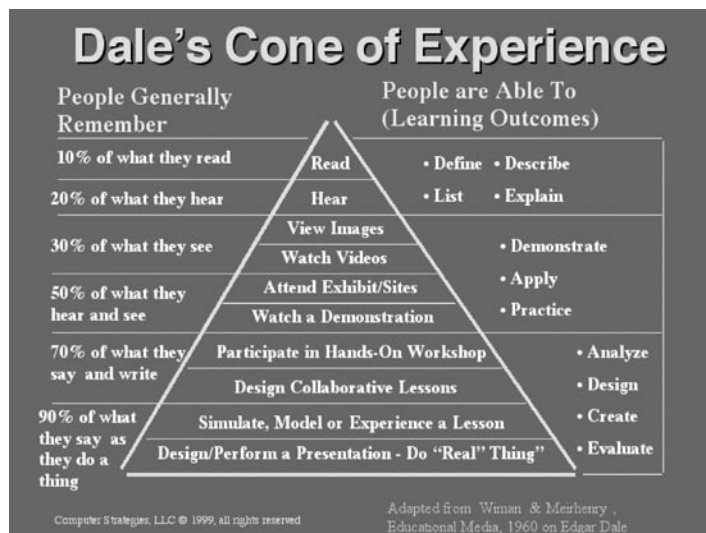


図 1. デールの「経験の円錐」

きただけ豊富に与えることが、最終的には抽象的な事物への理解をも自然に促すことになると考えた。彼は、視聴覚を通じて得られる教育的経験を図式化して整理し、「経験の円錐(Cone of Experience)」に示した。

この図によれば、学習者が様々な教育的経験をした場合、2週間後に学習内容が記憶に定着している割合は以下のものであるという。すなわち、読んだことは全体の10%、聞いたことは20%、直接見たことは30%、直接見聞きしたことは50%、自ら語ったことは70%、言いながら実際に行ったことは90%となっている。この分類に従えば、多くの学校で行われている授業は、せいぜい「聞いたこと」止まりである。学習者に授業内容を印象づけ、理解と思考の発達を促し、学習意欲を喚起するためには、自らと仲間の参与や、学習者自身が教材についての討論に参加すること、実際に動作をしながら会話をするなどが効果的であることが予想される。従って、教育者は、学習者が能動的に参加できるような授業教材を工夫して用意する必要がある。

また、中井俊樹氏の『組織的な授業改善をどのように進めるか』(p13)<sup>\*</sup>に示された、アメリカThe National Training Laboratories(全米教育協会)の「学習ピラミッド(Learning Pyramid)」記憶保持率も同様に、教育法の多様性についての示唆が面白い。

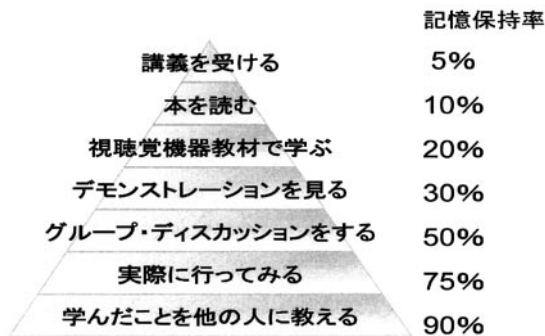


図2 学習ピラミッド (National Training Laboratories)

### 2-3. 教育とコミュニケーション

学習者が意欲的に参加したくなるような授業を作るために、また、効率的な教室運営を行うために、教育者は第一に、学習者との信頼関係を築く必要がある。

教育者は、学習者を理解し受容する用意があることを、態度に示す必要がある。また、クラスの交友関係をできるだけ把握し、コミュニケーションネットから外れている学習者が情

\* 淑徳大学FD研修会での講義資料(2009)



報から取り残されることのないよう、特に留意しなければならない。そして、コミュニケーションはすべての学習者と均等に行うように心掛け、対象に偏りがないように留意すべきである。一般に、教育者に期待されていると感じた学習者は成長するという。この現象は、ギリシア神話に登場する主人公の名に因んでピグマリオン効果と呼ばれる。(原岡, 1990)

教育者に認められ、その激励や支持や賞賛を受けることは、学習者を大いに刺激し、学習意欲の増進というプラスの影響を与える。この効果を授業に取り入れ、教育者の応援と支持を学習者に示すことで、より学習しやすい教室を作ることができるだろう。一般に、教育者は、意欲的で成績の良い学習者に対しては、激励・支持・賞賛の態度を自然と表しているものである。しかし、これらを最も必要とするのは、むしろ成績の振るわない学習者である。彼らの努力を見つけて認め、彼らの悩みや迷い、自信の持てない点やその原因をよく理解して受容し、彼らの出来ることや達成したことを発見して賞賛し、期待を示すのが望ましい。教育者の肯定的な態度と応援に影響されて、進度の遅れていた学習者の意欲と学習効果が向上すれば、それが教室全体の学力水準の上昇にも繋がる。その結果として、教育者はより授業を進めやすくなり、また、学習者とのコミュニケーションも更に取りやすくなるであろう。このように、学習者を把握して学生一人一人へのケアを心掛け、すべての学習者と均等にコミュニケーションを取ることが、効率的な教室運営には必要である。

### 第3章 理論を踏まえた教育実践

前述したように、本学部の中国語を履修する学生に共通する特徴としては、外国語に苦手意識を持っていること、対人コミュニケーション能力が低下していること、学習に対する意欲と共に学習の継続性が比較的に低いことなどが挙げられる。また、相互不干渉や謙虚さを重視するといった日本文化の特質は、中国語の講義の中では、学生がみんなの前で大きい声を出したくない、親しくない他人との会話練習を躊躇し、他人の間違いを指摘しない、積極的に質問しない、または自ら表現すること、アピールすることを極力抑えるなどとして現れることが多い。その一方、日本と中国とは儒教文化という同じ文化的根源を持ち、日本人は漢字や、中国の歴史・文化に対し親近感と興味が湧きやすく、また、近年上昇傾向にある大学生の中国語学習ブームも中国語教育の実施に有利であることを意味するだろう。教員が教室レベルでの講義を構築する際に、こうした学生の特徴を踏まえた対応が求められている。

学生の特徴に応じ、講義の教育的効果を高め、更には学生一人一人に対して学習への関心を喚起し、学習意欲を継続させることを目標に、中国語教室では、授業方法や教室運営に関して工夫を凝らし、様々な試みを施している。ここでは、前述の理論を応用しながら、本学部の中国語教育において実際行われている幾つかの実践を取り上げてみることにする。

### 3-1. 教員が交互に講義を実施する試み

前述①の初級クラス履修人数過多という問題を解決するため、今年度もクラスを二分して講義を進めることになった。それにより生じた学生への不利益を避けるための方法として教員が交互で教える方式を実施することにした。これまでクラスが二分された場合は、共通の教科書を使用し、同じ到達目標を設定した2人の教員が同じ時間帯にそれぞれ半わけにしたクラスを終始担当する方法を取ってきた。しかし、講義が進むにつれて教育内容に差がつくことが生じやすく、学生の後期の履修に支障をきたすことも見られることから、今年度は新たに、教員2人が二分された2つのクラスの講義を交互に実施するという試みを取り入れた。具体的には、週1回の講義を2週実施することに教員が担当クラスを交換し、特に発音担当や文法担当のように役割を分担するのではなく、毎回講義内容と進度について打ち合わせを行いながら、両教員が協同で講義を進行する。

教員が交互に講義を担当することは、授業内容に差がつくことを防ぐためだけではない。学生が複数の教員と触れ合うことにより常に講義に対する新鮮さを持ち続け、マナーリ化を防止するに伴い、刺激による注意力の向上も狙いである。それと同時に、教員がそれぞれに所持する教育方法の長所を生かし、互いに補い合うことにより高い授業効果を目指すことと、授業内容の一致、また、学習者の学習意欲の維持と促進も目的としている。(第4章で述べる)学期末に実施した授業アンケート調査の結果より、交互講義方式に対し学生が肯定的な意見が多数であることから一定の効果が得られたと考えられよう。一方、課題も感じている。その一つは授業方法の一貫性の問題である。アンケートの結果より、少数ではあるものの、「(同じ文法事項についての)教え方の違いがある」などの意見が出ている。更に、教員への負担も問題の一つである。交互に講義を実施することに従い、授業ごとに内容の確認や進捗の報告等、教員間の入念な打ち合わせが不可欠であるため、毎回授業前後の打ち合わせ時間が長く掛かり、教員への負担増加が現実問題として現れている。今後では、教員間の連携により共通の授業指導案の作成などを通し、バランスの取れた講義を目指すと共に、教員の負担を考慮した授業準備などへの工夫も必要となるだろう。もっとも、同科目の履修者過多クラスに対する応急配慮による試みだから、一時的負担加重も止むを得ないことであるが、一番の解決法は、授業数増加或いは受講者数制限の他なかるう。

しかし、この試み方法で得られたのは学生に対する利益効果以外に、教員同士のFD検討が常に実施できることにより教授法の向上も図れたといえるだろう。

### 3-2. 学生参加型授業

学生の多くは、外国語に苦手意識を持ち、また学習に対する意欲も低下していることが指摘されている。そこで、学生の中国語学習に対する興味関心を喚起し、並びに学習の意欲を

持続させるため、各教員は、学生一人一人がより積極的に講義に参加するよう、教室レベルで様々な工夫を施している。その一つは発音の練習である。

声を出して読むことが語学学習に有効であることは周知されている。特に中国語の発音表記法（ピンイン・ローマ字）はアルファベット26文字を基本として考案されているため、日本人学習者はしばしば、中国語ピンインの綴りを実際と異なる音として認識してしまいがちである。その理由は、日本人学習者は英語や日本語のローマ字表記に慣れているため、その読み方に引きずられることが考えられる。しかも、必修科目として英語を長年学習して単語の発音の癖が付いているため、また、日本語にない「四声（中国語発音の声調）」が理論のみでは覚えにくいいため、繰り返し発声して練習することが有効かつ不可欠である。しかし、大学における第二外国語としての中国語授業の場合、講義時間が限られ、現実には、文法の説明や、語彙の解釈、本文の理解などに重点が置かれがちであり、音読は省略されることが多い。それが「話せない外国語」という現象を生み出した一因とも考えられる（胡ら、2004）。

こうした現状を踏まえて、本学の中国語教育では、音読を講義構成の重要なポイントの一つとして位置づけた。従って、限られた時間を如何に有効利用し、効率のある音読練習を実施するかが教員に出された課題である。単調な発音練習だけでは学生がすぐに飽きてしまい、学習効果に繋げることが難しい。学生が自ら興味を示し、積極的に参加を望むような練習方法の工夫、つまり、学習者が能動的に参加する講義の構築が必要となる。これを目標に、教員は講義中一般的な発音練習、ペアでの会話練習などに加え、学生にさせる音読練習に変化を持たせたことを試みた。

例えば、日本人が一般的に苦手とする捲舌音と舌歯音の発音については、マスターするには声を出して、入念に練習することが不可欠である。但し、単純に発音の練習を繰り返すだけでは、嫌がる学生も見られる。そこで、教員は発音の基本を覚えさせたあと、ゲーム感覚で早口言葉の練習を取り入れることにした。例えば、「四是四，十是十，四十是四十，十四是十四。（四は四，十は十，十四は十四，四十は四十だ。）」のような練習がある。こうしたスピードと正確さが求められる早口言葉の練習に対し、音読練習に嫌気を見せていた学生も積極的に参加する姿が確認されている。

前述デールの「経験の円錐」と「学習ピラミッド」によれば、ただ本を読むのは記憶に定着しにくく、学習者に教育内容をより印象づけ、学習意欲を喚起するためには、視聴覚や議論、自ら実践してみるなどが効果的である。こうした理論を踏まえ、実際に教室では、学生に音頭をリードさせる朗読方法や、発音の間違い探しゲームをする方法、視聴覚機器等を活用して発音練習をする方法などを取り入れ、学生が自ら参加する機会作り心掛けていく。この他、例えば四声学習の終盤で、ピンインを振った中国の歌の歌詞カードを作って配布し、学

生に歌を覚えさせることを通して発音学習の効果を狙う。

こうした遊び心や面白みを持たせた音読練習により、学生の学習に対する意欲を高め、自発的に積極的に授業に参加することを期待する。また、更には、中国語学習への興味・関心を持続させることを通して、他の学習に対する興味を引き起こすことも狙いの一つである。

### 3-3. 学生一人一人に対するケアの心掛け

アコモデーション理論は、教員が学生に好意や関心を抱いてアプローチすること、両者が円滑なコミュニケーションを取ることは心理的収束に繋がり、授業効果にプラスの働きを示唆する。

初級中国語の履修生は様々な学科と学年に所属しており、履修の目的や学力もまた各々異なる。中には対人コミュニケーションに積極的でない学生や、また語学学習に慣れておらず、学習方法を身に付けていない学生も少なくない。こうした学生を中心に、教員は学生一人一人に対する気配りを心掛けている。

例えば、本学部では出席確認にICカードリーダーを使用しているが、中国語の講義では、これ以外に学生の名前を中国語で呼び上げ、それぞれに大きな声で中国語で返事されるような出席を取る方法を加えている。その目的は、学生に中国語に慣れてもらう他、クラスメート間の距離短縮と、教室の一体感を目指すことである。そのため、中国語教室内ではできる限り、中国語で互いに名前を呼ぶこと、更には、親しく呼びやすくするために、教員が学生に中国名の呼び名を付けるなどの方法を取っている。こうした試みによって、学生は互いに親近感を持ち、実際に学生間の交流が促されている様子が確認できた。互いに学習意欲を高められるようなクラスの雰囲気構築するためには、非常に効果的な方法だといえよう。

その他、個々の学生の学習状況に応じ、教員は相応しい指導法を心掛けている。中国語の授業は、多くの学生にとって第二外国語という理由もあり、学生が授業外に確保する学習時間は少ない傾向がある。それ故、一旦講義内容の理解に支障が生じた場合は、そのまま学習意欲の消失に繋がりがやすく、中には履修を放棄する学生もいる。こうした状況を最小限に抑え、学生の学習を持続させるために、教員は定められた講義時間以外にも、学生の実情に合わせて、個別に指導や補習などを実施し、一人一人に対する指導を心掛けている。特に、その過程で注意しているのは個々の学習者の理解の段階や事情に合わせて、適切なコミュニケーションを取りながら指導を進めることである。教員と学生が互いに理解し、信頼関係を築くことが学習効果に繋がれると期待される。

また、授業中の私語や学生の遅刻や欠席、及び集中力散漫などの問題には決して回避せず、有効なアプローチ方法を探りながら指導している教員の努力に学生は何かと良い影響を受けていると思われる。

こういった努力は次章で取り上げたアンケートの自由記述から「教員との関係が楽しい」の記述や、更に学生の授業への満足度が高いことからその効果が伺えるだろう。

## 第4章 学生の学習効果調査検討

学生たちの学習状況と学習効果を把握しながら1学期の試みをしたが、その成果を検討するため、期末試験終了後、2日間に渡り、2名の教員で交互に講義する試みを実施した初級クラスの受講者に筆記による無記名アンケートを行ない、108人の回答が得られた。本章でその結果のまとめ及びデータによる考察を述べる。なお、本学部の「基礎中国語」履修者総人数約200人に対し、前期開講クラスは4つあるが、その内の人数過多のクラス2つを対象に本論第3章で述べた第1項目の試行を行ったので、このアンケートはこの2クラスに対して行った。

### 4-1. アンケート内容

所属学科や学年など基礎質問以外に、次のような設問をした。

1. この方法(2人の教員が二分した1クラスを交互で教える方法)をどう思うか。良かったか、良くなかったか、その理由。
2. 中国語を履修した理由。自由書きの形。
3. この授業を履修した自分の目的が達成したか。「達成できた」「どちらかというと達成できた」「達成できなかった」の3選択肢。
4. この授業に満足しているか。「とても満足した」「まあまあ満足した」「どちらかという満足した」「やや不満だった」「不満だった」の5段階選択肢。

また、授業や教員に対する意見や感想の自由記述の欄も設けた。

1. の質問に対して「方法が良かったか」を「授業が良かったか」と誤解した人もいたようだ(これも全部有効データとして扱うことにする)が、全体的にいうと、学生たちの真面目な回答が得られた。

### 4-2. アンケート結果

調査の基本データとして、回答者の状況は次の通りになっている。

学年は1年生50人、2年生8人、3年生35人、4年生13人であった。学年無記入者も2人いた。

学科は、社会福祉学科の学生が最も多く、67人いたが、その次は実践心理学科19人、人間社会学科は15人の順になっている。しかし、学科無記入者は7人いた。その割合は図4に示す。



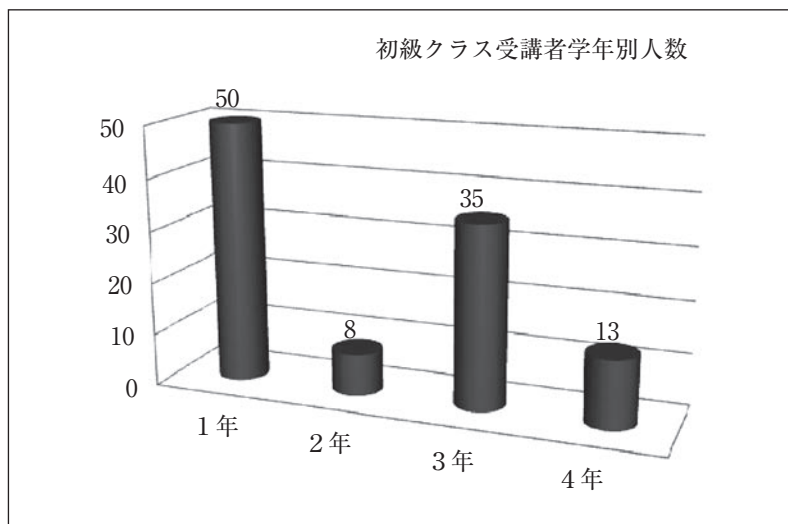


図3. 初級クラス受講者学年別人数 (単位:人)

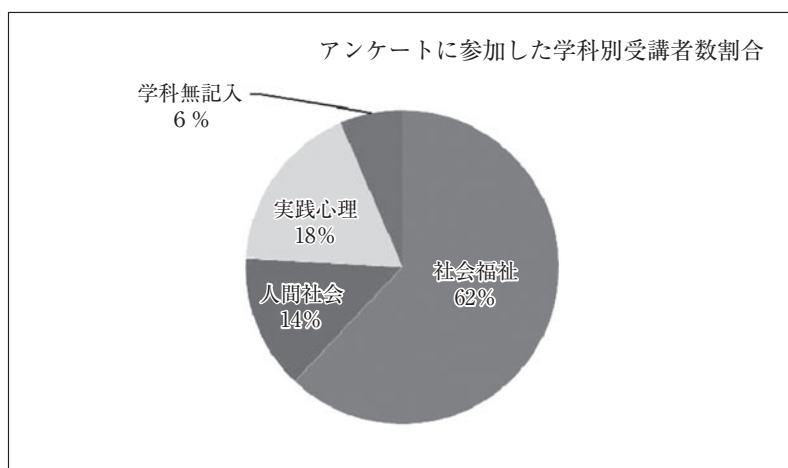


図4. アンケートに参加した受講生の学科別人数分布

次は、それぞれの設問に対する回答状況に基づいて分析を進める。

(1) 「二分した1つのクラスを2名の教員が交互で教える方法をどう思うか」の設問に対する回答は「良かった」と回答したのは全113回答数(複数回答あり)中81人(72%)いたが、「良くなかった」と回答したのは32人(28%)いた。学年別で見ると、低学年の1,2年生は43(70%)人が「良かった」と回答し、18(30%)人が「良くなかった」と回答したのに対し、3,4年生はそれぞれ38人(73%)と14人(27%)人だった。図5の通り、グラフで表すと、肯定的意



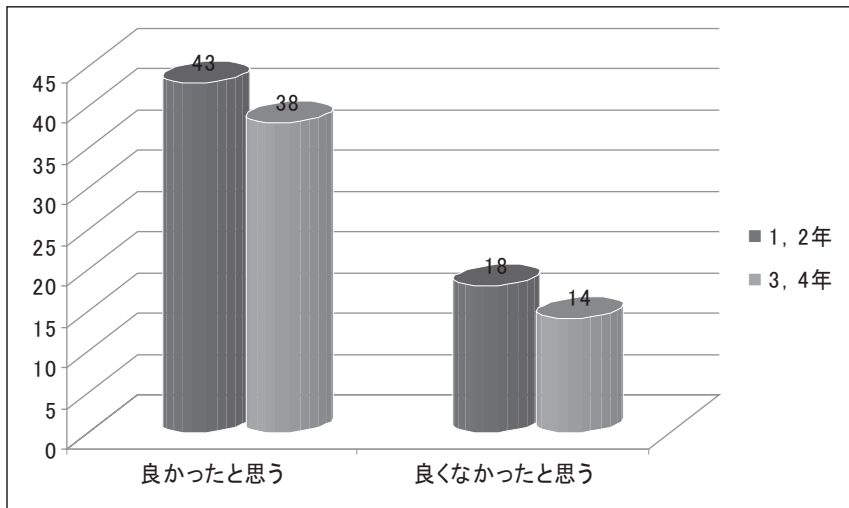


図5. 「この方法は良かったか」に対する回答状況（単位：人）

見を示した人数が多かったことが分かる。しかも、低学年生より、高学年生に肯定的な意見を示した人がやや多いことも読み取れる。

中では、「良かった」の理由を答えた人が41人いて、「少人数で勉強できたので」の類に分類できる回答は全部で20人あるに次ぎ、「2人の先生で違う刺激が得られた」のような回答は17人いた。その他の回答をしたのは4人だった。

一方、「良くなかった」の理由を答えた人が、「教え方の違いがあるので」といったのは12人いた。しかし、同じ回答者で両方答えた人もいて、この試行方法の良い点と良くない点を挙げてくれたと思われ、有り難い。

(2) 「中国語を履修した理由」についての自由回答には、111（複数回答あり）の回答があったが、まとめると、「中国語に興味があるから」と「単位がほしいから」と「中国語がマスターしたいから」の3つに大別でき、これら以外の回答は6人いたが、「その他」に分類するとし、3項目の回答と学年の状況は次頁図6の通りに示す。

「その他」が入った学年別の割合は次頁表2と表3に示した通りになる。

「その他」に入る回答は高学年生に多いが、その内訳は「中華料理・中国ドラマが好きだから」（2人）に、「時間割の都合上」（2人）、また、「友達に誘われた・勧められた」（2人）などあった。

このアンケート結果から学生の大学第二外国語である中国語学習に対する学年による初期モチベーションの違いが伺え、興味深い。

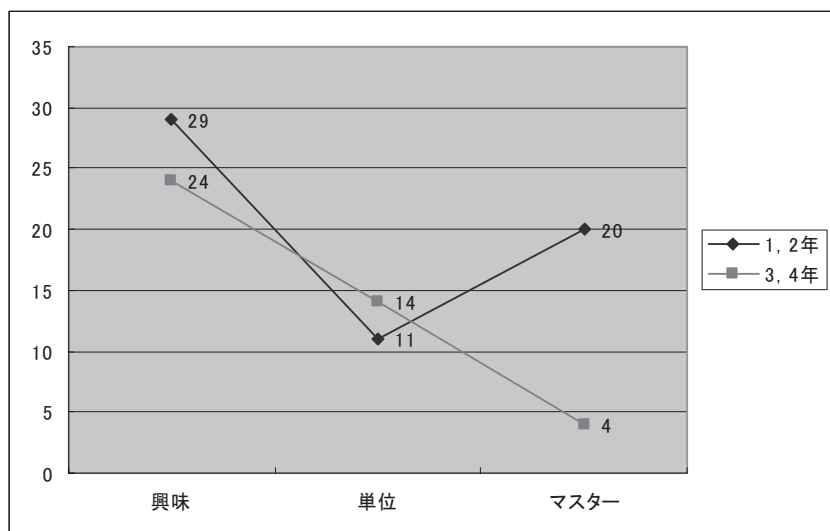


図6. 基礎クラス受講者の中国語授業履修理由 (単位：人)

表2. 2番の質問に対する低学年(1, 2年)生の回答別割合

	興味	単位	マスター	その他
1, 2年生	46%	17%	32%	5%

表3. 2番の質問に対する高学年(3, 4年)生の回答別割合

	興味	単位	マスター	その他
3, 4年生	50%	29%	8%	13%

中国語に対して興味があると答えたのは全体的に多く、学年の区別はあまりないが、単位が必要のため履修した人は明らかに高学年生に多いようである。しかし、中国語がマスターしたいという目的を持って授業に来ている受講生は、低学年生に多かったのは肯首できる一方、後期に履修者が減少したことから見れば、難しい学習に挫折しやすいのも彼らであるまい。どのように将来に向けた学習を継続させ、本当に就職活動等の必要に応えられる語学技能とコミュニケーション能力を備えさせることは、本人の努力も当たり前だが、カリキュラムを含めた教育側の制度や語学教育力に関わる課題でもあろう。

(3) 「この授業を履修して自分の目的は達成できたか」の設問に106人の回答が得られ、詳細は図7に示す。

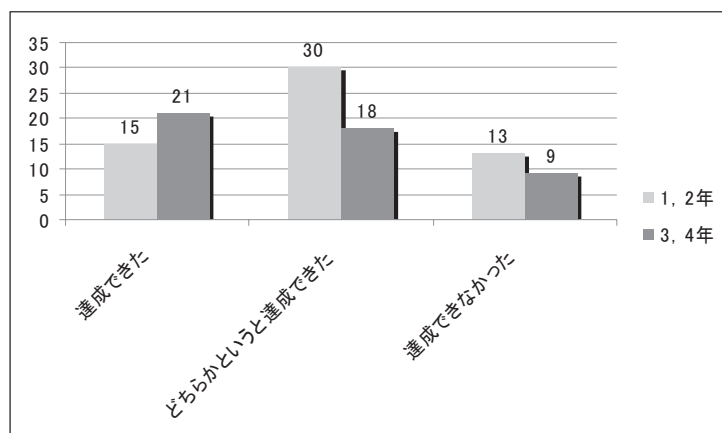


図7. 「授業を履修する目的が達成できたか」設問への回答状況 (単位：人)

「達成できた」と「どちらかという達成できた」を合わせると84人になるが、全体の約80%を占める。「達成できなかった」の詳細を「勉強不足」にしたのは9人（低学年6人と高学年3人）いて、「出席は良くない」と「その他（明記無し）」の理由にしたのはそれぞれ1人いた。

表4. 3番の質問に対する低学年（1，2年）生の回答別割合

	達成できた	どちらかという達成できた	達成できなかった
1，2年生	26%	52%	22%

表5. 3番の質問に対する高学年（3，4年）生の回答別割合

	達成できた	どちらかという達成できた	達成できなかった
3，4年生	43%	38%	19%

また、学年別にそれぞれ回答の割合を見ると、高学年生の自覚達成度が低学年生より高いのが分かる。

(4) 「この授業に満足したか」の質問に対し、5段階の選択肢があったが、「不満だった」の回答がなく、4段階の数字が出ている。図8の通りである。

図8で分かるように、「やや不満だった」と回答したのは低学年の2人で、個別の先生に

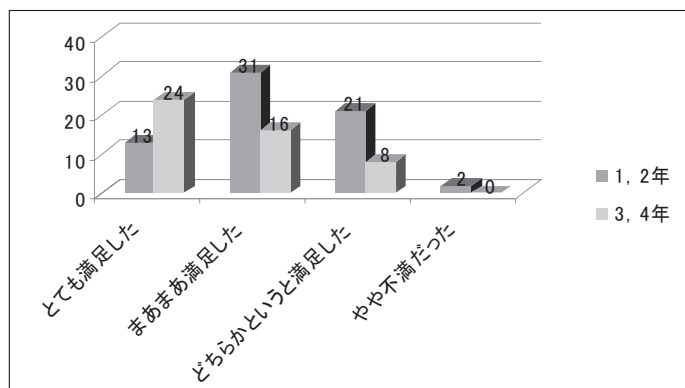


図8. 基礎中国語授業に対して満足か不満かの回答状況 (単位: 人)

教わりたいのが原因ではないかと、自由回答で読み取れた。ここで明白になるのは、同じ教材、同じ教室、また同じ教え方と同じ進め方でも、3, 4年生の方が1, 2年生の低学年より、理解力と対応力があり、教育効果が違うことが一般的にいえること、また、学年が若くなるにつれ、教え方も難しくなるのではないかとと思われる。これに対し、教育方法も、学生の学習方法に対する教育を含めて、常に対応策を更新していかなければならぬ。

#### (5) アンケートの自由記述から

自由記述には半数以上の人々がメッセージを書き（学年未記入者1人を除き、書かなかったのは低学年生25人と高学年生24人）、中では「一人一人に対して指導し、授業内容が濃かった」、「教え方が丁寧で分かりやすかった」、「先生と生徒との距離が近いのでとても楽しかった」などの3, 4年生のコメントに対し、「質問しやすかった」、「少人数で和気藹々とした授業が大学っぽくなくて楽しかった」と新規大学生の感想が高校生らしい面白みがあった。「文化に関する勉強がしたい（2人）」を含めたその他の回答7人を除いて、次のように、低・高学年対比でコメント（複数回答あり）を並べて見ることにする。

#### [1, 2年]

ゆっくり進めてほしい（7人）  
 楽しかった（14人）  
 難しい（7人）  
 このままの教え方で満足している（25人）  
 少人数は良かった（15人）  
 日常会話を学びたい（4人）

#### [3, 4年]

ゆっくり進めてほしい（3人）  
 分かりやすくて楽しかった（17人）  
 このままの教え方で満足している（21人）  
 少人数は良かった（22人）  
 日常会話を学びたい（1人）

絶対人数で1, 2年生が3, 4年生より多いので、割合でいうと、左右の差もそれ程のものではないが、「難しい」と認識したのはほとんど低学年の学生だった。実際には、この現状に合わすため、やむを得ずシラバスより進度を遅らせたが、それにもかかわらず、付いていくのは難しい学生も低学年に出てくる。前述の全体的に低学年生の理解力の問題が裏付けられることになるのではないと思われる。

半年間中国語教室で学生とのやり取りを通し、最初のお互いに接しにくい雰囲気からわりと大胆に発言できるまで、学生たちが意識しないうちに、外国語学習が自己開発に役立っていることが分かってくる。毎年数少なくとも出ているが、元々中国語学習が必要で中国語を履修したわけでないような学生も、中国語教室での学習を通して勉強が好きになり、大学が好きになり、人と付き合うのが好きになったと変化を見せ、人間力において成長した例も本学期的受講者にあった。

## ○ 結語

少子化に伴う大学教育の在り方というべき学生のマナーや学習方法を含む基礎教育に関して、特に語学教育において、毎年の学生状況に応じ模索しながら教授法の進歩を図らなければならない。これに関する取り組みの記述は時間と紙面関係上本論で言い尽くせないことが多く、他の機会に委ねたい。

選択科目としての第二外国語中国語教室運営は、好ましくない条件下の努力、探索、工夫を通して、予測した効果があったが、課題は多い。

世界的経済情勢と日中両国の関係変化や進展に伴って、語学教育では、教養語学より実用語学、欧米よりアジアの言語への関心が高まるという傾向があり、「日中間の政治経済の状況次第では、近い将来に大学でも中国語ブームといわれる事態が再来する可能性は大きい。」(興水, 2005)

本研究は、語学教育は語学の知識を与えるのみならず、大学生に対する基礎教育においても役割を果たすべきことを検討してきた。学生の社会マナーや学習態度、学習に対する興味と取り組む姿勢に関する教育はこの中国語教室で実現できるように更なる実績を期待する次第である。

(はじめに・第1章・第4章・結語の執筆はト雁が、第2章は山口若菜が、第3章は裘曉蘭が主に担当した。)

## 参考文献

- エドガー・デール 1969 *Audio-Visual Methods in Teaching* 『学習指導における聴視覚的方法』  
International Thomson Publishing
- Giles, H. & Smith, P. M. 1979 Accommodation Theory: Optimal levels of convergence. *Language and Social Psychology* (pp. 45-65). Edited by Howard Giles and Robert St. Claire, Oxford: Blackwell
- 胡玉華・宇野忍 2004 「大学生の中国語の学習方法に関する実態調査」『國學院雑誌』第105巻第4号 國學院大学
- 興水優 2005 『中国語の教え方・学び方－中国語科教育法概説－』富山房インターナショナル
- 陣内正敬 1988 「言語変種とスピーチスタイル」『日本語学』7-3 明治書院
- 鈴木孝夫 1977 『ことばと文化』岩波新書
- 中井俊樹 2009 『組織的な授業改善をどのように進めるか』名古屋大学高等教育研究センター
- 原岡一馬 1990 『人間とコミュニケーション』ナカニシヤ
- 橋内武 1999 『ディスコース－談話の織りなす世界－』くろしお出版



## On Some Practices for Developing Language Teaching Methods: Trials for organizing Chinese classes

BU, Yan, YAMAGUCHI, Wakana, QIU, Xiaolan

When we organize our Chinese classes as a second foreign language at the university level, we have many problems. For example, too many students tend to register for one class; there are not enough teaching hours for them to acquire a proficiency in Chinese; a decline in academic ability; and the lack of patience for studying or communicating with others. Our faculty has also been facing those problems in the Chinese teaching courses, so we have been trying some different practices of teaching to arouse, keep student's curiosity and enhance their communication ability.

The most important point for these practices is to establish a relationship for communicating with students by using the Linguistic Accommodation Theory. It is also important that teachers should work out some way to teach students whose situation changes constantly. We believe that each student should be given a sense of being taken good care of in class, and the introductory education is indispensable, as well as, language education.

Our aims in this article are to present the existing situations and the goal for our Chinese classes, and to introduce our trials that connect theory and practice for realizing our quest. Furthermore, we uncovered the most ideal way of teaching language by monitoring the effects on students via questionnaire research.